

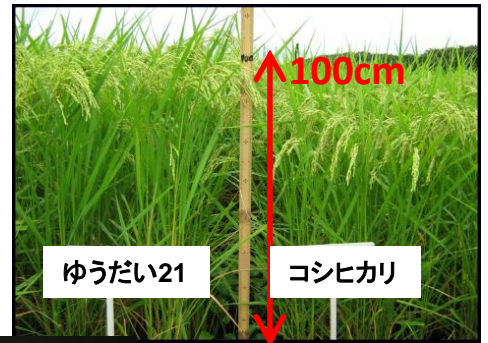
「ゆうだい21」の特徴と栽培上のポイント

宇都宮大学農学部附属農場

2014年1月

ゆうだい21の特徴(コシヒカリとの比較)

- ・出穂は2日、成熟は4、5日遅い。
- ・稈長は5~10 cm、穂長は2~5 cmほど長い。
- ・1穂粒数は多いが穂数はやや少なく、登熟歩合はやや低い傾向が認められる。
- ・収量はコシヒカリ並みかやや低い。
- ・いもち病にやや強く、穂いもちへの移行が少ない。
- ・高温条件下の栽培でも乳白米などの発生が少なく、外観品質が低下しにくい。
- ・収穫適期幅が広く、刈遅れでも品質低下が少ない。
- ・特有の粘りでコシヒカリを上回る良食味品種である。



ゆうだい21の育種過程

1990年、農場の試験田に極めて大きい稲穂の株があった。この株を翌年以降栽培すると分離したため、コシヒカリ並みの熟期と大きい株を選んだ。2000年に固定された集団である系統中で、草姿・穂共に大きい変異株があり、この株を2001年から21L系統としてコシヒカリと比較栽培しながら品種固定を図った。上記の特性を有する本品種を2007年2月に「ゆうだい21」として品種登録出願をし、2010年1月に登録となった。

栽培上のポイント

- 栽培適地
栽培適地はコシヒカリ栽培地域とほぼ合致しており、播種、移植時期ともにコシヒカリに準じる形でよい。
- 種子予措
種子の休眠が深いため、浸種期間を1~2日程度長めにすることで催芽時の揃いが改善される。
- 播種量等(稚苗:25日間育苗の場合)
乾籾100~120 g/箱、必要苗箱数は18~20箱/10 a。なるべく播種量を減らした「うす播き」がよい。
- 移植
栽植密度は16~18株/m²(60株/坪)、1株当たり3~4本植の疎植気味の栽培がよい。
- 施肥
基肥・追肥共に現地のコシヒカリ並みでよい。窒素施肥量で基肥4 kg程度とし、追肥は出穂20日前を目安に同2 kg程度を施用する。さらに同10日前施用を加えた2回の分施でもよい。地力や移植時期に応じて適宜加減をする。
- 病害虫防除
コシヒカリ慣行栽培に準じてよい。いもちには比較的強いのでコシヒカリよりも防除の必要度は低い。
- 収穫
緑色籾の割合で15~10%が刈り取り適期である。出穂後の積算気温で約1000~1100℃に該当するが、刈遅れに伴う品質の低下がコシヒカリより小さく、収穫適期幅は広い。

栽培ごよみ 基本技術の励行で安定多収・高品質栽培を目指そう!!

主な農作業	播種量 乾籾で箱当たり100~120gとする。	基肥は化成肥料(窒素12%)で現物10a当たり35kg前後を施用する。	除草剤散布は指定の散布時期内で早めに。水深5cmを1週間程度保つ。	イネミスゾウムシ等の防除を行う。	追肥時期は出穂前20日が基本。NK化成(窒素17%)で10a当たり現物で10kg。出穂前20日と10日前に5kgずつ施用も可能。	いもち等の適期防除を励行する。	収穫適期は出穂後35~40日、積算気温では約1000~1100℃。緑色籾割合では15~10%である。	過乾燥に注意。			
	温度管理に注意。伸ばしすぎない。	入水・移植代播き	60株/坪、3~4本植、疎植がよい。		追肥		収穫	乾燥・調製			
主な生育ステージ	出芽	育苗	活着	分けつ	分けつ盛期	最高分けつ期	幼穂形成~穂孕期	出穂期	登熟期	収穫期	乾燥・調製
主な水管理		原則浅水で活着促進				小ひびが入る程度		高温時は掛け流し		落水は出穂後1か月が目安。台風通過後など乾燥熱風時は深水	
月	4	5	6	7	8	9	10				

※上記の栽培ごよみは、ゆうだい21の育成地の栃木県真岡市における標準的な栽培様式である4月上旬播種(稚苗育苗)、4月末~5月上旬移植を基本にして、作成してあります。気象・土壌などの栽培環境や作期が異なる地域では、必ずしも適合しない部分があることも予想されます。それぞれの地域の条件にあった栽培を目指してください。

問い合わせ先: 宇都宮大学農学部附属農場 〒321-4415 栃木県真岡市下籠谷443 電話 0285-84-2424 e-mail: fuznoujy@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp